

宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈 七

信 時 哲 郎

73 羅紗売

① バビロニ柳掃ひしと、
あゆみをとめし羅紗売りは、
つるべをとりてや、しばし、
みなみの風に息つきぬ。

② しらしら醸す天の川、
はてなく翔ける夜の鳥、
かすかに銭を鳴らしつゝ、
ひとは水繩を繰りあぐる。

大意

バビロン柳が顔をはらったので、
歩くのをやめた羅紗売りは、
井戸の釣瓶を取るとしばらくの間、
南風に吹かれて一息ついた。

しらしらと濁酒を醸すかのように天の川は流れ、
夜の鳥ははてしなく空を翔けて
いく。

かすかに小銭の音を鳴らしながら、
羅紗売りは井戸水を引き上げる。

モチーフ

「〔冬のスケッチ〕」から発展した文語詩だが、推敲の過程で、賢治は羅紗売りを登場させた。大正半ばから昭和初年にかけて、羅紗売りと言え、白系ロシア人の仕事と決まっていたようだ。だとするとバビロニ柳も、賢治が学名をひけらかしたの

ではなく、『旧約聖書』の「詩篇」に収められたバビロンの川の柳の木に琴を立て掛け、故郷を思つて嘆くユダヤ人のイメージが重ねられていたと考えるべきであろう。実体験か虚構かの判断はしにくい、賢治は「五十篇」の「いたづきてゆめみなやみし」で、朝鮮人の飴売りに思いをさせたように、ここでは心ならずも故郷を離れて羅紗を売り歩くロシア人の心境を思いやったのだと思われる。

語注

バビロニ柳 シダレヤナギのこと。学名は *Salix babylonica*。「掃ひし」とあるのは、柳の枝が羅紗売りの顔を掃いたようになったからだろう。

羅紗売り 羊などの毛を密に織って毛羽立たせ、織り目が見えないようにした厚手の織物がラシャ。それを専門に売り歩く行商人のこと。島田隆輔（後掲B）が指摘するように、羅紗を売っている行商人は、大正六年（一九一七年）のロシア革命をきっかけに日本に亡命してきた白系ロシア人であろう。賢治は「未定稿」の「雪とひのきの坂上に」でも、「羅紗を↓毛布」「を↓匳」荷へる行商の二人ぞ坂を下り来り」と書いているが、これもロシア人による行商人であろう。沢田和彦（『白系ロシア人と近代日本文化』『白系ロシア人と日本文化』成文堂 平成十九年二月）は、「日本在留の白系ロシア人がよく従事した職業のひとつがラシャ売りである。1920年代後半にはその三分の一から半分以上がこの職業に従事した」とし、「1924年（大正13年）9月9日付けの『函館日日新聞』によると、函館市内に50人のロシア人が在住していたが、そのうち30人あまりがラシャの行商をしていた」と書いている。沢田は日本人の洋服化を促進したのは、ロシア人の

ラシャ売り商人だったのではないかとするが、高級チョコレートを日本に導入したフォードル・モロゾフもラシャの行商から身を起している。島田によれば、昭和五年の国勢調査では、岩手県の「外地人外国人ノ職業」のうち「露店(屋台店ヲ含ム)商人 行商人 呼売商人」について、朝鮮人は六十五人(男・六十五、女・〇)、中華民国人は六十四人(男・六十四、女・〇)、露西亜人は十人(男・九、女・一)なのだという。また、ポダルコ・ピョートル(阪神間在住白系ロシア人社会)『白系ロシア人とニッポン』成文社 平成二十二年七月)は、「利口な行商人たちは、「ロシア人」や「難民」、「亡命者」などの〈怪しい気持ち〉を引き起こしたり、むりやりに同情を呼ぶ名前ではなく、当時日本で最も尊敬された「独逸人」などと偽って商売をやることもあった」というフォードル・モロゾフの手記の中の言葉を紹介している。

銭を鳴らしつゝ、井戸水をくみ上げる際に、懷中(ポケット?)の小銭が鳴ったのであろう。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第十三・十四葉を下書稿(一)とし、黄野(260行)詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(タイトルは手入れ段階で「行商」、のちに「羅沙売り」。藍インクで㊦)、黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿(三)(鉛筆で㊧)、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

まず「〔冬のスケッチ〕」の第十三・十四葉から黄野(260行)詩稿用紙に移された下書稿(二)を見てみたい。

やみに一つの井戸ありて
行商にはかにたちどまり
つるべをとりてや、しばし
天の川をばながめたり

あまの川の小さき爆発

たよりなく行ける鳥あり
かすかにのどをならしつゝ、
ひとはつるべを汲みあぐる。

「〔冬のスケッチ〕」では、同じ第十三葉にある詩句が「二百篇」の「病技師(二)」と「二百篇」の「(ひかりものすとうなるこが)」に発展しているが、当時の花巻の土地に詳しい佐藤勝治の「〔冬のスケッチ〕作者彷徨想像図」(『宮沢賢治青春の秘唱・冬のスケッチ“研究” 十字屋書店 昭和五十九年四月)によれば、賢治の生家から千人供養塔のある松庵寺が「病技師(二)」の舞台で、ついで賢治は東北本線を越えたところにあつた「水車(粉屋)」で「(ひかりものすとうなるこが)」を取材し、さらに進んで石神に出たあたりに柳の木と井戸があり、ここが本作の舞台になったのではないかとする。

大沢正善(『臘月』『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月)は、本作の次に配列されている「臘月」にも水車が登場することから、「臘月」もこの時の経験に基づく作品ではないかという。本評釈でも文語詩の定稿には連作の傾向が指摘できる場合があるとしてきたことから、大沢の指摘は興味深いが、両作品が無関係であるとは言わないにしても、定稿としてまとめた際のイメージには、だいたい距離ができていくように思う。

下書稿(二)の手入れでは、かなり字句の入れ替えを行っている。中途段階で賢治が書き直した形態は次のようなものだ。

バビロニやなぎうちかづき
あゆみをとめし羅沙うりは
つるべをとりてや、しばし
さそりのほしをもとめたり

しらじら醸す天の川
はてなく翔ける夜の鳥

かすかにひじを鳴らしつ、
ひとは水竿を操りあぐる

大きな変化としては、まず、行商人が「羅沙うり」に特定されたことをあげることでできる。羅紗売りの行商とは、語注にも書いたように、白系ロシア人が携わる仕事だとされていたものだ。そして、「バビロニやなぎ」が登場していることも、極めて重要だと思う。どちらも「〔冬のスケッチ〕」には書かれていないことであり、賢治が本当にヤナギの木を見たのかどうか、あるいはロシア人と思われる「羅沙うり」を、本当に見たのかどうかはわからない。ただ、ロシア人がキリスト教を信奉していたらどうかから考えると、「バビロニやなぎ」が偶然に登場したわけでもないように思われる。というのも、『旧約聖書』の「詩篇」には、バビロンの柳についての記述があるからだ。

紀元前六世紀、古代イスラエル民族のユダ王国が新バビロニア王国の王ネブカドネザル二世に征服されると、貴族や聖職者らをはじめとした住民がバビロンに強制移住させられた。『日本大百科全書』によれば、このバビロン捕囚は、「イスラエル人にとって大きな民族的苦難であったが、この間の精神的労苦はかえって民族の一致を強め、信仰を純化する端緒となった」という。「詩篇」の第三百三十七篇には、そんなバビロンの地で暮らすユダヤ人たちの嘆きが書かれている。

われらバビロンの河のほとりにすわり シオンをおもひいでて涙をながしぬ
われらそのあたりの柳にわが琴をかけたなり そはわれらを虜にせしもの われらに
歌をもとめたり我儕をくるしむる者われらにおのれを歎ばせんとて シオンのう
た一つたへといへり われら外邦にありていかでエホバの歌をうたはんや エ
ルサレムよもし我なんちをわすれなば わが右の手にその巧をわすれしめたまへ
もしわれ汝を思ひいず もしわれエルサレムをわがすべての歓喜の極となさず
ば わが舌を頸につかしめたまへ エホバよねがはくばエルサレムの日に エド
ムの子輩がこれを掃清け その基までもはらひのぞけといへるを聖意にとめたま
へ ほろぼさるべきバビロンの女よ なんちがわれらに作しごとく汝にむくゆる

人はさいはひなるべし なんちの嬰兒をとりて岩のうえになげうつものは福ひな
るべし

『旧新約聖書』（日本聖書協会 昭和十二年十月）

日本がロシア人たちを捕囚としたわけではないので、完全に状況が一致しているわけではない。賢治は「五十篇」の「〔いたづきてゆめみなやみし〕」で、朝鮮人の飴売りを描いていたが、状況としてはそちらの方に、より似ているかもしれない。しかし、帝政ロシア時代に比較的裕福に暮らしていたはずなのに、故国に留まることを許されず、異郷の地で暮らすことを余儀なくされ、柳の木の下でようやく一休みするということ境を考えると、バビロンにおけるユダヤ人の悲哀に通じるところもあったように思う。

日本と台湾でラシャ売りの行商をしていたヴィクトル・プロスツェヴィチは、旭川に本部を置くラシャ売りのグループに属していた時、次のような訓令を渡されたのだと自身の回想記に書いている（沢田和彦「白系ロシア人と近代日本文化」『白系ロシア人と日本文化』成文堂 平成十九年二月）。

卸値が八、九円のものならば、はじめは二十円から二十二円ぐらいに吹っかける。買手の方も、心得たもので、ちゃんと値切ってくる。指を一本出したら、十円にまけるということだ。つまり、それでもう一元なり二円なりのもうけが出るわけだが、あわてて売ってはいけない。そこからが商売だ。はじめの言い値から、少しずつ下げていく。すると買手の方もいくらかずつ指し値を上げてくる。一枚で三円か四円のもうけが出たところで手を打つ。それなら一枚売れば一日分の宿賃とタバコ代になるし、場合によっては食費や交通費にもなる。

「バビロニ柳」や「バビロン柳」は他の作品にも登場するが、『新校本全集』の索引によれば、それは「旭川」（「春と修羅 補遺」）と「一一八 函館港春夜光景 一九二四、五、一九、」（「春と修羅 第二集」）であり、どちらも白系ロシア人が多かった街である。賢治の頭には、これらの街と「ロシア」羅沙「バビロニ柳」とい

う図式が刷りこまれていたのかもしれない。

もつともポダルコ・ピョートル(「在日ロシア人の〈顔〉を変えた関東大震災」『白系ロシア人とニッポン』成文社 平成二十二年七月)によれば、革命直後に日本にやってきた亡命ロシア人の〈第一波〉は、緊急避難的に日本に滞在したのみで、関東大震災後の国際社会の協力によって日本を去る者が多かったのだという。ロシア移民の〈第二波〉は震災後にやってきた人々で、庶民階級の出身者が多く、「来日した目的が、革命の恐怖から〈命を守る〉ことではなく、〈商売〉(ビジネス)を行うことであった」という。多くの行商人をはじめとして、洋菓子メーカーの創始者として名高いモロゾフやゴンチャロフ、野球選手のスタルヒン、音楽家のレオ・シロタら、日本で成功をおさめた人々も、この〈第二波〉に属する人たちが多かったという。

賢治をはじめ、当時の日本人たちはこうした状況をどこまで知っていたのか定かではないが、仮に商売のためだけに来日していたとしても、異郷をさまようことの辛さや厳しさにはかわりないはずで、やはり賢治には哀れな存在であるように見えただと思う。

文語詩は岩手で生きる様々な人を対象とし、様々な人の喜怒哀楽を描いているものと思われるが、「二百篇」では、タツピング一家、ミス・ギフォード、プジェー神父にも取材対象を広げている。いずれもキリスト教との関わりが深い(キリスト教徒と言え、日本人だが斎藤宗次郎も登場している)。本作における羅紗売りも、キリスト教とのつながりということから考えることも可能であろう。

先行研究

島田隆輔 A「冬のスケッチ散佚稿／『文語詩稿』への過程から迫る試み」『島大国文 26』島大国文会 平成十年二月

佐藤栄二「『羅紗売』をよむ」(『宮沢賢治 交響する魂』蒼丘書林 平成十八年八月)

島田隆輔 B「原詩集の輪郭」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク〈写稿〉による過程』広島大学博士論文 <http://r.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00032003>)

平成二十二年九月)

74 臘月

みふゆの火すばるを高み、 のど嗽ぎあるじ眠れば、
千キロの水をになひ、 かうかうと水車はめぐる。

大意

冬の火とも言ふべきスバルが天空に高く上がっているので、ウガイをしがてら眺めて主は眠りにつくが、
千キロにもなる水を担って、 こうかうと星の水車は回り続ける。

モチーフ

花巻町内の水車小屋を舞台にしたものなどの指摘もあるが、「千キロの水」がついたままで「かうかうと」回る水車となると、相当な規模のものになる。改稿の過程で現実の水車小屋を離れたと考えるべきではないだろうか。賢治は星空を水車にたとえ、音をたてて回ると書くことがよくあった。童話「水仙月の四日」に、「カシオペア、／もう水仙が咲き出すぞ／おまえのガラスの水車／きつきとまわせ」とあり、また、童話「シゲナルとシゲナレス」には、「夢の水車の軋りのやうな音」を聞き、「ピタゴラス派の天球運行の諧音」だとする部分もあった。とすれば、「かうかうと」回る水車とは、スバルのことを意味していたように思えてくる。

語注

臘月 旧暦の十二月のこと。また、冬至の後の第三の戌いぬの日に、狐の獲物を神々や祖先にまつる祭事を指す。『字通』には「〔荊楚歳時記〕に、十二月八日を臘日とし、臘鼓を打って疫を祓うとあり、仏教では「臘八会(ろうはちえ)」を釈迦成道の日とする」とある。

すばる おうし座の散開星団でプレアデス星団とも呼ばれるスバル星団のこと。ス

バルは外国語のようににも思われそうだが、「統べる」(集まる)という意味の日本語。十二月には天頂附近に見ることができ。また、奥本淳恵(『春と修羅』《第一集》所収詩篇「昂」《昂》の意味するもの)「論攷宮沢賢治10」中四国宮沢賢治研究会 平成二十四年一月)がまとめているように、賢治はスバルのことを庚申信仰などと結びつけながら、宇宙を覆う真実の象徴として捉える意識もあつたようだ。「二百篇」の「庚申」には、「昂の鎖」(昂とはスバルのこと)とあり、また童話「銀河鉄道の夜」には「プレシオスの鎖」が登場する。「プレシオス」としたのは、誤りか、それとも意識的な呼び換えなのかは解釈が分かれるところだが、いずれにせよ背景に「聖書」(ヨブ記)の「プレアデスの鎖」があつたことは確実で、中国や日本のみならず、西洋でのスバルのイメージも賢治は大切にしていたようだ。

評釈

書簡下書きの書かれた黄罫(22行) 詩稿用紙の裏面に下書稿(一)、下書稿(二)(断片)、表面に戻つて下書稿(三)(タイトルは「臘月」。以下同じ。鉛筆で写)、下書稿(三)、定稿用紙に書かれた定稿断片、その裏面に定稿の二枚四面、(『新校本全集』の数え方に倣えば)五種が現存。生前発表なし。定稿には一連構成のためか丸番号の表記がない。

大沢正善(後掲)は、「[冬のスケッチ]」の第十三・十四葉を関連作品とする。

※

風の中にて
ステッキ光れり
かのにせものの
黒のステッキ。

※

風の中を
なかとていでたてるなり

千人供養の

石にとまれるよるの電燈

※

なほさながらに光りものと見えにける

こなにまぶれし水車屋は
にはかにせきし歩みさる

西天なほも 水明り。

※

やみのなかに一つの井戸あり

行商にはかにたちどまり

つるべをとりてや、しばし

天の川をばながめたり。

※

あまの川の小さき爆発

たよりなく行ける鳥あり

かすかにのどをならしつ、

ひとはつるべを汲みあぐる。

季節の一致、水車屋、天の川： たしかに一致する点が多い。当時の花巻の土地に詳しい佐藤勝治の「[冬のスケッチ]作者彷徨想像図」(『宮沢賢治青春の秘唱』「冬のスケッチ」研究) 十字屋書店 昭和五十九年四月)によれば、賢治の生家から千人供養塔のある松庵寺を抜け、東北本線を越えたところに「水車(粉屋)」があつたとのことで、大沢もここがモデルになっているのではないかとする。

ただ、前二篇が「二百篇」の「病技師」(二)、後二篇が「二百篇」の「羅沙売」に発展し、本作と一番関連の深そうな三篇目も、「二百篇」の「ひかりものすとなるゐが」に発展していることが、すでに『新校本全集』でも指摘されている。もちろん一篇の先行作品から複数の文語詩ができないとは言えないし、大沢の言うように、本作の直前に「羅沙売」があり、連作的な関係にあつたのではないかとい

った指摘も重要だ。しかし、「〔冬のスケッチ〕」以外にも発想の元はあったように思う。

というのも、佐藤が示した水車を回すための水の流れは、地図にも載っていないようなものであり、「千キロの氷をになひ」の句は似つかわしくないように思われるからだ。

岡井隆（後掲 B）も、

「千キロの氷」といえば非常な重荷だろう。それを担って、水車がまわっている。氷を担っているというのだから、水車も氷で動かないのかと思うと、「かうかう」とまわっている。水車の羽根のところに、氷った水を受けて、力一ぱい働いている水車。とくに、上から水の注ぐ「上射式」の水車となれば、「担う」という感じに近く見えるはずである。千キロ、つまり一トンの氷片を担うというのだから、かなり巨大な水車か、何連式という水車か。そういう水車が、花巻盆地にあつたのであろうか。

と書いているが、少なくとも花巻町内の小川には似つかわしくない。

千キロの水を担いながら「かうかう」と回る水車について、現実的に考えてみると、水車自体の重さも千キロほどなければ水の重みに持ちこたえることができないと思うので、単純計算して二千キロの水車を「かうかう」と動かすだけの水量が必要だということになる。これに見合う水車といえ、水力発電所のタービンくらいではないかと思われる。

水力発電といえば、賢治は「春と修羅 第二集補遺」の「雪と飛白岩の峯の脚」〔五〇八 発電所 一九二五、四、二、〕の発展形）で、岩根橋水力発電所の「蝸牛水車」の様子を描いてもいた。

雪と飛白岩ギヤプロの峯の脚

二十日の月の錫のあかりに

激んで赤い落水管と

ガラスづくりの発電室と

……また余水吐の青じろい滝……

黝い蝸牛水車スネールタービンで

早くも春の雷気を鳴らし

鞘翅ダイモコレオプトラ発電機をもつて

愴たる夜の睡気を顫はせ

大トランスの六つから

三万ボルトのけいれんを

野原の方へ送りつけ

むら気多情の計器メーターどもを

ばかばか監視してますと

いつか巨大な配電盤は

交通地図の模型と変じ

小さな汽車もかけ出して

海よりねむい耳もとに

やさしい声はいってくる

しかし、この「蝸牛水車」が、「臘月」に結びついたとは、さすがに考えにくい。興味深いことに「五〇八 発電所」と同一日付の「五〇六」〔そのとき嫁いだ妹に云ふ〕にも「昂の星」が登場するのだが、残念ながら直接的な関係性は指摘しにくい。

むしろ気になるのは、地上ではなく、水車と宇宙との関わりである。例えば「歌稿〔B〕」に「53 軸棒はひとばんなきぬ凍りしそら ピチとひびいらん微光の下に。」とあるが、その余白には次のように書きつけてある。

小き水車の軸棒よもすがら軋り

そらは藍いろの薄き鋼にて張られしかば

たとへその面を寒冷の反作用漲るとも

裂罅入らんことはありぬべし

直前には、「52 鉛などとかしてふくむ月光の重きにひたる墓山の木々。」という短歌が書かれているが、その前に「大等先生の説教と水車小屋」という気になる書き込みもある（大等とは島地大等。少青年期の賢治に影響を与えた浄土真宗の僧侶で、盛岡の願教寺住職）。

島地大等の説教の際に見た水車の軋りは、天空に作用したように感じられたというのだが、童話「鳥の北斗七星」になると、次のように書かれるようになる。

雲がすっかり消えて、新らしく灼かれた鋼の空に、つめたいつめたい光がみなぎり、小さな星がいくつか聯合して爆発をやり、水車の心棒がキイキイ云ひます。たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅がはひつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握んで空の天井の向ふ側へ持つて行かうとします。

ここでは、もう宇宙自体が水車にたとえられている。

童話「水仙月の四日」は次のように始まる。

「カシオペア、

もう水仙が咲き出すぞ

おまえのガラスの水車

きつきとまわせ。」雪童子はまつ青なそらを見あげて見えない星に叫びました。

『定本語彙辞典』では、「これはカシオペア座が、ほぼ北極星を中心にして一日一回転し、しかも天の川中にあることから水車とみなしたものと」するが、かならずしもカシオペアと天の川と結びつけるべきものでもないだろう。天体の動きと水車、音を関連付けた例が他にもあるからだ。

童話「シグナルとシグナレス」では、「夢の水車の軋りのやうな音」を聞き、そ

れを「ピタゴラス派の天球運行の諧音」だとしている記述もある。

小野隆祥（「修羅の自覚」『宮沢賢治の詩作と信仰』泰流社 昭和五十四年十二月）は、先に引用した歌稿やその書き込みなどから、賢治は島地大等からピタゴラス派の天球観念を聞き、天蓋または天球が軸棒によって回転することを意識し、実際、賢治は幻聴として「天球の音楽」を聞いていたのだろうともいうのだが、その当否はともかく、こうして類似した表現を並べてみると、千キロの水を担う水車とは、「流水を利用して羽根車を回転させ動力を得る装置」（『日本国語大辞典』）という字義通りの「水車」ではなく、「かうかう」という諧音とともに回る天空の水車を意味していたと解した方がよいように思えてくる。

たしかに発想の時点では、「（冬のスケッチ）」のような現実世界の水車があったのかもしれない。島地大等とも、何らかの関わりがあったのかもしれない。が、文語詩定稿に小屋を思わせるものは残っておらず、文語詩の冒頭に「みふゆの火すばるを高み」と掲げられていることを思えば、最初から天空の方を思い浮かべるべき詩であり、地上の「水車」は、大宇宙の回転の比喩として登場したのだとする方が妥当であるように思える。

大沢は「この作品は、地上の現実をリアルに描いたのではもちろんなく、宇宙的で神話的な作品なのでもない」。「地上と宇宙を、土俗と神話を二重化しながら、特定の事蹟が秘匿されつつアイデンティカルに語り継がれる伝説を構成した作品なのである」とまとめているが、天上と地上を結んでいるという点では同意できるが、大沢が言うより、本作はずっと「宇宙的で神話的な作品」であったように思えるのである。

先行研究

岡井隆 A 「『文語詩稿』の意味」（『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月）
岡井隆 B 「不眠と労働」（『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月）
大沢正善 「臘月」（『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）

75 「天狗草 けとばし了へば」

天狗草、けとばし了へば、

親方よ、

朝餉とせずや、こゝな苦むしろ。

……りと引け、

りと引けかし。

十二八！

その標うちてテープをさめ来！……

山の雲に、ラムネ湧くらし、

親方よ、

雨の中にていつばいやらずや。

大意

天狗草を蹴飛ばしてしまったのだから、

親方よ、

朝食にしないか、ここの苔を筵のかわりにして。

……りと引つ張れ、

りと引つ張ってくれ。

あと二十八！

そこに印をつけたらテープを巻いてこっちへ来い！

山の雲はラムネが湧いているようだ、

親方よ、

雨の中でいつばいやろうじゃないか。

モチーフ

先行作品の日付から考えると、花巻温泉に花壇を作るための測量現場が舞台となっているようだが、文語詩では測量士の親方と朝餉を共にし、山の雲のラムネを呑もうと誘いかけるものになっており、社会批判のイメージが窺いにくくなっている。おそらく推敲の過程で、「春と修羅 第二集」の「三七〇 電軌工事 一九二五、八、一〇、」で描かれていた花巻駅における軌道線の工事をする親方のイメージを取り入れる構想を立てたため、社会批判のモチーフを取りやめることにしたのだと思われる。

語注

天狗草 先行作品「一〇五三〔おい けとばすな〕一九二七、五、三、」や文語詩下書稿にコチニール（レッド）とあることから、鮮紅色の天狗草、すなわちベニテングタケを指すと思われる。コチニールとはサボテンに寄生するカイガラムシから作った鮮やかな赤色の色素で、食品添加物としても広く使われている。ベニテングタケは、マツタケ目テングタケ科の毒キノコで、高さは十〜二十センチ、傘の径は十〜十五センチと大きくて華麗。欧米諸国では健康と喜悦を表す赤と、星を連想させる白いイボから幸福をもたらすキノコとして愛されてきたのだという。その毒の成分は学名の *Anania muscaria* からムスカリンと名付けられ、賢治は先行作品の下書稿でその名をあげているが、『日本大百科全書』によれば、近年、毒性の強いムスカリンの含有量は少ないことがわかり、ムッシモールやイボテン酸などのアミノ酸系の化合物が主たる毒成分だということがわかったのだという。これは、めまいや狂騒、幻覚、昏睡などを起すが、数時間ほどで覚めるもので、死に至った例はほとんどないらしい。北欧のバイキングは戦いの前にベニテングタケを食べて勇猛心を掻き立てるのに用い、また、長野県の上田近辺では、美味であることから塩漬けにするなどして食されるのだという。

けとばし了へば 「けとばししまえば」とも読めそうだが、音数の問題から「けとばしおえば」を取りたい。岡井隆（後掲 A）は「ケトバシシマエバ」を取り、赤田秀子（後掲）は「ケトバシオエバ」、入沢康夫（『文語詩難読語句（6）』）は両

論併記する。

十二八 本作は字余りを含みながらも五七五七七の短歌が三つ連続することによって構成されている。字下げ部分だけでも五七五七七を形成しているが、音数律に従って読もうとすると、「十二八」は、「たすにはち」あるいは「にじゅうはち」と読むのがふさわしいように思える。単位は不明だが、測量に関するものである。下書稿(四)には「+二十七」ともあった。赤田秀子(後掲)は、「プラスニジユウハチ」を提案している。

その標うちてテープをさめ来！ 測量に使うための器具。標は測桿(そっかん)(ポール)あるいは測串(ピン)を指し、テープは巻尺のことだろう。「来」は下書稿(四)で「こ」のルビがある。「テープをおさめて来い」という親方の命令だろう。視点人物の心の声だとも読めるが、ここでは部下を罵るようにして仕事を進める親方の言葉だろう。

ラムネ レモン風味の炭酸飲料を意味するレモネードが訛ったもの。明治時代から玉入れ瓶が普及し、庶民の飲み物として広く愛された。一方、賢治も愛飲したと言われるサイダーは、『日本百科全書』によれば「日本独特の清涼飲料で、香料を加え甘味料とクエン酸で味つけた無色の炭酸飲料をいう。明治時代に「シヤンペン・サイダー」という人工香料を用いた炭酸飲料を売り出したのが好評を得たため、同類品の通称となった。英語の soda (サイダー) はりんご果汁やりんご酒のことで、日本のサイダーとは別物である。ラムネと大差ないが、ラムネはレモネードからきた名前前で、サイダーもレモネードの一種と考えてよい」とのこと。

評釈

「春と修羅 第三集」所収の「一〇五三〔おい けとばすな〕一九二七、五、三、」を文語詩化したもの。ただし、後述するとおり、「春と修羅 第二集」の「三七〇〔朝のうちから〕一九二五、八、一〇、」のアイディアも採用されている。黄野(222行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは「赤ききのこ」)、「一〇五三〔おい けとばすな〕」の下書稿(三)が書かれた黄野(222行) 詩稿用紙に書か

れた下書稿(二)(タイトルは「測量」)、その余白に書かれた下書稿(三)(タイトルは「測量」、同じ紙の裏面に書かれた下書稿(四)(タイトルは「測量」。鉛筆で写)、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。定稿に丸番号の表記はない。先行作品「一〇五三〔おい けとばすな〕」の最終形態は次の通り。

おい

けとばすな

けとばすな

なあんだ たうたう

すつきりとしたコチニールレッド

ぎつしり白い菌糸の網

こんな色彩の鮮明なものは

この森ぢゅうにあとはない

あゝムスカリン

おーい！

りんとは引つばれ！

りと引つばれたら！

山の上には雲のラムネ

つめたい雲のラムネが湧く

これだけでは測量の風景であることがわかりにくいだが、文語詩では「りん」と引つ張る対象がテープ(巻尺)であることが示されているので、作業中にベニテングタケを蹴飛ばした現場監督をたしなめながらも、山の上にわくラムネを飲もうと誘う軽妙でユーモラスな作品であるように読める。

ただ、「詩ノート」に記された「一〇五三〔おい けとばすな〕」の最初期の形態である「一〇五三 政治家 一九二七、五、三、」(下書稿(一))は次のようなもので、およそトーンは異なる。

あつちもこつちも
ひとさわぎおこして
いっぱい呑みたいやつらばかりだ

羊歯の葉と雲

世界はそんなにつめたく暗い

けれどもまもなく
さういふやつらは
ひとりで腐って
ひとりで雨に流される
あとはしんとした青い羊歯ばかり
そしてそれが人間の石炭紀であつたと
どこかの透明な地質学者が記録するであらう

「詩ノート」の同一日付作品には「一〇五五（こぶしの花咲き）五、三、」があり、ここには「この巨きななまこ山のはてに／紅い一つの擦り傷がある／それがわたくしも花壇をつくってゐる／花巻温泉の遊園地なのだ」といった言葉があることから、賢治が設計した花壇の測量現場での取材であつたように思われる。花巻温泉とは、ただのレジャーランドではなく「賤舞の園」（「未定稿」）「歳は世紀に會つて見ぬ」でもあつたため、花巻温泉の設置に関わつた「政治家」が批判されているのであろう。日付はないが、同年五月三日から八日までの間に書かれたと思われる「二五六、サキノハカといふ黒い花といつしよに」（「詩ノート」）には、「おほよそ卑怯な下等なやつらは／みんなひとりで日向へ出た輩のやうに／潰れて流れるその日が来る」とあり、「輩」のモチーフが登場することからも、強い関連性が認められる。また、ここには「革命がやがてやってくる」という激しい言葉も書きつけられていた。

しかし、下書稿(二)になると「測量」とタイトルが付けられて次のようにまとめられる。『新校本全集』では、下書稿(一)との差について「内容的には下書稿(二)以下と大きく相違しているが、一部重複する語句もあるので、ここで扱っておく」と書か

れる程である。

早いはずが
巨きな赤い毒^{ブスキウ}蕈^{のこ}だ
ところがおよそきのこなら
どんな大きなきのこでも
ひとりで崩れてひとりで雨にとかされる
おい！
りととひつばれ！
りととひつばれたら！
山の上はつめたい雲のラムネ
どうだ親方一ぱいやるか
あすこのこのラムネをさ

「読書レポート」（「賢治研究10」宮沢賢治研究会 平成十九年五月）でも、下書稿(一)と下書稿(二)の差が激しいことが指摘され、「当初は政治家へぶつぶつ言いたいことをメモとして書いていたが、赤いキノコにたとえているうちに賢治の気持ちはキノコへ行つてしまふとされている。「ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつら」として、花巻温泉を作つた「政治家」に加え、測量士の親方もその仲間にされたのだろうが、実は花壇を設計している賢治自身も政治家や親方と同列の存在である。意地悪な見方をすれば、賢治自身の立場に曖昧さがあるため、鮮烈な言葉を盛り込めなかつたのだと考えることもできよう。

また、木村東吉（「宮沢賢治・封印された「慢」の思想 遺稿整理時番号10の詩稿を中心に」『国文学攷176・177』広島大学国語国文学会 平成十五年三月）が言うように、晩年の「慢」の自覚から、賢治はプロレタリア文学に接近したような表現を後退させていったという傾向があるためでもある。重要な視点であるとは思ふものの、本稿では、もう一点、下書稿(一)から下書稿(二)への奇妙な改稿の背景に、「春と修羅 第二集」の「三七〇〔朝のうちから〕一九二五、八、一〇、」があつ

たことについて考えてみたい。

「三七〇「朝のうちから」」の下書稿(一)にあたる「三七〇 電軌工事」を引く。

……稲田いちめん雨の脚……

一九二五、八、一〇

カーブのところは

X形の信号標や はしごのついた電柱や

風の廊下といふふうにできあがつた

……青く平らな稲田のなかのはなしだよ……

山の上はつめたい雲のラムネ

どうだ親方 こくつと呑るか

……プラットホームのはしらには

とりのこりの鬱金のダリヤ……

恍惚として風にあらはれ

しょんぼりとして、稲びかりから漂白される

……どうだ親方 いっぱい呑るか

やあ 汽缶車がやってくる

日露戦争のときのワリヤーク号みたいに

黒いけむりをもくもく吐いて

雨を二つに分けてひどい勢で走ってくる

ここに登場する「山の上はつめたい雲のラムネ／どうだ親方 こくつと呑るか」が、「一〇五三「おい けとばすな」」に流用されることとなり、それを引き継いだ文語詩にまで継続していることは確かだろう。そして賢治は「三七〇 電軌工事」の系列の口語詩で、もうこのフレーズを復活させていない。

「三七〇「朝のうちから」」の取材日である一九二五年(大正十四年)八月十日、賢治は早池峰山に向かうために花巻駅に行ったようだ。この早池峰山行の成果としては、翌日の十一日に、河原で夜を明かした際に見た僧の幻覚(幽霊?)について記述した「三七四 河原坊(山脚の黎明) 一九二五、八、一一」、また、「五十

篇」の「(水と濃きなだれの風や)」の先行作品となった「三七五 山の晨明に関する童話風の構想 一九二五、八、一一、」を残している。

ところで、「三七〇「朝のうちから」」の下書稿のタイトルに出てくる「電軌」とは電気軌道、すなわち道路に敷設された鉄道のことを指し、ここでは花巻から大沢温泉に向かって伸びていた盛岡電気工業線(のちの鉛線)のことを指している。大正十四年八月には、ちょうどこの電気軌道の延長工事(大沢温泉―西鉛温泉。大正十四年十一月一日に開業)期間にもあたっていたので、そこに向かおうとしていた「親方」を書いたものだと思うれる。

ちなみに盛岡電気工業には花巻温泉に向かう線(のちの花巻温泉線)も大正十四年八月一日に開業していたが、こちらは鉄道の専用線を走ったので鉄道線であり、電気軌道ではない。鉄道線の管轄は鉄道省で、電気軌道の管轄は内務省だったため、実際の鉄道専用線と電気軌道線の境界は曖昧だったというものの、法令上は明確に区別されていた。

しかし八月十日の早朝は、木村東吉(『春と修羅 第二集』創作日付の日の気象状況)『宮沢賢治《春と修羅 第二集》研究 その動態の解明』深水社 平成十二年二月)によれば土砂降りであり、前日の九日も降水量が三六・八ミリもあったという。これから早池峰山に登るには不吉な天候であったはずだし、駅で見かけた親方も工夫も、とても仕事ができそうな状況ではなかったように思われる。それでも賢治は雨天にもかかわらずいぶん嬉しそうだ。「電軌工事」下書稿(三)では、親方や工夫たちに鼻歌まで歌わせている。

……朝のうちから

稲田いちめん雨の脚……

駅の出口のカーブのところは

X型の信号標や

はしごのついた電柱で

まづは巨きな風の廊下といったふう

ひどく明るくこしらえあげた

(数文字不明) 遊園地より

……(数文字不明) は(数文字不明) のだ
親方は

信号標のま下に立って

びしやびしや雨を浴びながら

ちつと向ふを見詰めてゐる

ふしへ……雨やら雲やら向ふは暗いよと……

そのこつちでは工夫が二人

つるはしをもちしょんぼりとして

三べん四へん稲びかりから漂白される

ふしへ……くらいところにお湯屋ができたよと……

そのまたこつちのプラットフォーム

駅長室のはしらには

夜のつゞきの黄いろなあかり

へ雨やら雲やら向ふは……

やつてくるのは機関車だ

ずるぶん長い煙突だ

安奉線のやうだけれども

まっ正直に稲妻も浴び

黒いけむりもくもく吐いて

浅黄服着た火夫もわらって顔を出し

雨だの稲だのさつと二つに分けながら

地響きさせて走ってくる

「遊園地」の文字もあるが、これは花巻温泉のことだろう。ただし、開業したばかりの鉄道線(花巻温泉線)は、まだ軽鉄花巻駅(中央花巻駅。現在、ホテルグランシエール花巻のあるあたり)まで乗り入れてはいなかった。ただ、七月二十二日には鉄道線の軽鉄花巻駅への乗り入れを申請し、九月三十日には認可されているの

で(湯口徹『花巻電鉄(上)』ネコ・パブリッシング 平成二十六年四月)、もしかしたら、試運転のようなものがされていたのかもしれない。

だとすれば、「やつてくるのは機関車だ/ずるぶん長い煙突だ/安奉線のやうだけれども」と、まるで初めて機関車を見たかのように書かれた詩句にも納得がいく。というのも、軽鉄花巻駅は盛岡電気工業線と岩手軽便鉄道で線路もホームも共用していたので、そこにかつて安奉線(南満州鉄道の満鉄の安東から奉天までを結ぶ線)で使われていた岩手軽便鉄道の蒸気機関車が「やつてくる」だけでは、なんら驚くに足りないが、もし花巻温泉の方から蒸気機関車がやつてきたのだとしたら、もう二度と見ることでできない貴重な機会だったと言えるからだ。花巻温泉線には電車が走っていたのではないかと思われるかもしれないが、たしかにその予定ではあったが、東芝の労働争議のために変電所の設備が遅れ、八月一日に開業してから十月二日までの間は、電車を走らせることができず、その期間のみ蒸気機関車を走らせていたのだという。

賢治が鉄道ファンで、岩手県内をはじめとする鉄道路線が開業すると早々に乗りに出かけ、鉄道の工事現場にまで足を運んでいたことを考えると(信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」『賢治研究96』宮沢賢治研究会 平成十七年九月)、さまざまな路線、さまざまな車両が行き交って、我が町・花巻が鉄道の要衝として発展していくことは、嬉しくてたまらなかったと思われる。

そんな賢治が花巻温泉線の試運転の蒸気機関車を見て、鉛線の路線を延長させようとする工夫たちを見かけたのだとすれば、雨天であるのに賢治が上機嫌で詩文を書いたこと、仕事があるのかないのかもわからない工夫たちに、「いっぱい呑るか」と呼びかけ、鼻歌を歌わせたことも理解できるのではないだろうか。

ちなみに、賢治はこの日、花巻駅に向かったが、おそらく岩手軽便鉄道を使ったわけではないと思われる。賢治は、この日のうちに鶏頭山の中腹にある七折れの滝に行っているようだが(木村東吉 前掲)、大正十四年八月の『汽車時間表』によれば、最も時間をかけずに七折れの滝まで行くには、東北本線の花巻駅を七時十一分に出て、隣の石鳥谷駅に七時二十八分着。そこから大迫行きの宮守自動車会社の

七時四十分の定期路線に乗って八時三十分に大迫に着くルートを取ったと思われる。これなら、七折れの滝に昼過ぎには到着することが可能だからだ。

岩手軽便鉄道を使うなら、花巻駅を五時三十五分に出て、六時三十二分に土沢着。ここから大迫まで十五キロほど歩かなくてはならないが、朝が早い分、二時ごろには七折れの滝まで行くことができたように思われる。その次の列車は六時四十五分に花巻駅を出発するが、それでも夕方前には七折れの滝まで行けたと思うが、早池峰山まで登る気でしたのだとすれば現実的ではない。

したがって「相当の量の俸給を保証されて居りまして／近距離の汽車にも自由に乗れる」(「春と修羅 第二集 序」)身分だった賢治は、「三七〇 電軌工事」の光景を、八月十日の午前七時ごろ、東北本線の花巻駅に行く途中、岩手軽便鉄道と盛岡電気工業線が共用していた方の花巻駅(軽鉄花巻駅／中央花巻駅)を七時ごろに通りがかった際、あるいは東北本線のホームから見たのだと思われる。

細かな詮索を綴ってきたが、決して鉄道の蘊蓄を語りたかったわけではない。マニアの心理について考えるには、マニアックに追究しなければ全貌が明らかにならないと思うからである。こうした追究があつてはじめて、「三七〇(朝のうちから)」の背景に鉄道ファンならではの感情があつたことが考えられるわけであるし、また、その直前に置かれた、日付けのない「三六九 岩手軽便鉄道 七月(ジャズ)」という列車の動きとジャズのリズムをあわせた陽気で軽快な作品についても、その陽気さの元が、おそらくは花巻温泉線の開業直前であつたために嬉しくてたまらずに書いたのではないかという見通しが立ってくる。晩年に使用した「雨ニモマケズ手帳」に、賢治は「三六九 岩手軽便鉄道 七月(ジャズ)」と「三七〇(朝のうちから)」の一節を書き記しているが、この頃の気分の高揚が、晩年になっても忘れられなかったからかもしれない。

さて、こうして考えてくると、新校本の編集者や、宮沢賢治研究会の面々に不思議な気持ちを抱かせた「一〇五三(おい けとばすな)」の改稿過程についても、理解ができそうな気がしてくる。もちろん木村の言うようなプロレタリア文学的な側面を隠そうとした意識も働いたのかもしれないし、花巻温泉への反発を忘れたわけでもないだろう。ただ、花巻温泉の測量士の親方について書いているうちに、か

つての電軌工事の親方や工夫たちを思い出し、その時の様子を思い出すと、もう花巻温泉に対する批判を書く気持ちも吹き飛んで、大正十四年夏の楽しい気分が湧きあがり、そちらで作品をまとめる方向に変えたのではないだろうか。楽しい詩は、楽しく読まれるべきであろう。

先行研究

岡井隆 A「親方と天狗草」(『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月)
岡井隆 B「賢治 詩と短歌の間」(『短歌研究 53—8』短歌研究社 平成八年八月)
赤田秀子「文語詩を読む その5 声に出してどう読むか?」(『天狗草 けとばし(へば)を中心に』(『ワルトラワラ 16』ワルトラワラの会 平成十四年六月)
大角修「『宮沢賢治』入門^⑩ 最後の作品群・文語詩を読む」(『大法輪 81—3』大法輪閣 平成二十六年三月)

76 牛

①そは一ぴきのエーシャ牛、 夜の地靄とかれ草に、 角をこすりてたわむる、。

②窒素工場の火の映えは、 層雲列を赤く焦き、

鈍き砂丘のかなたには、 海わりわりとうち顫ふ、

さもあらばあれ啜りても、 なほ啜り得ん黄銅の

月のあかりのそのゆゑに、 こたびは牛は角をもて、音高く

柵を叩きてたはむる、。

大意

それは一頭のエアシャー種の牛、 低く這う夜の靄と枯れ草の中で、 角を柵にこすり付けて遊んでいる。

窒素工場の火が燃えるのが映って、 層雲の列は赤く染まり、

なだらかな起伏の砂丘のむこうには、海がわりわりとうちふるえ、そのうえに嘯つても、なお嘯りつくことができそうにない黄銅色の月あかりが差しているために、今夜は牛が角でもって、大きな音を出し柵をたていて遊んでいるのだろう。

モチーフ

賢治が花巻農学校の北海道修学旅行に引率した際に書いた口語詩が先行作品。苦小牧の海岸ちかくにあった牧場で柵に角を叩きつけて遊ぶ牛を描いただけのように見えるが、北海道帝国大学等を参観したすぐ後の賢治は、開拓使以来の北海道の農業が常に牛や馬と共にあったことを再確認し、他愛なく戯れている牛にも愛情あふれる目を注いだのではないかと思う。

語注

エーシャ牛 スコットランド原産の乳牛。「エーアシャー」、「エアシャー」などと表記されたが、今日では「エアシャー」と表記されることが多いようだ。赤褐色の斑紋があり、三日月型の角を持つ。強健で耐寒性に優れ、粗放な飼養管理にも強く、高緯度の地域での放牧にも向いているという。乳量が少ないため、現在はホルスタイン種に置き換えられて、ほとんど飼養されていない。本作の取材地は苦小牧にあった中村牧場で、平成十六年四月十三日の「苦小牧民報」によれば、サイロは現存しているのだという。

地靄 「じもや」と読む。地を這うように立ち込めていた靄のこと。『定本語彙辞典』には、「地上に低く立ちこめたもや(薄い霧の状態)を言う賢治の造語か、正式の気象用語にはないが、民間レベルでの気象語」とある。先行作品に「輻射のにぶ」とあることから「輻射霧」(≡放射霧)のことだと思われる。「放射霧」とは、『日本国語大辞典』によれば「地表面の放射冷却によって、地表に接した空気が冷却したときできる霧。主として風の弱い晴天の明け方に発生する」という。

窒素工場 下書稿には「バルプ工場」とあった。舞台となった苦小牧は製紙工場で

有名だが、花巻農業高校の修学旅行の一行は、王子製紙苦小牧工場を見学したという。賢治が農学校に提出した「〔修学旅行復命書〕」の結びには、「バルプ工場の煙赤く空を焦し、遠く濤声あり」とある。窒素工場への書き替えは音韻や字面によるものかと思う。

評釈

「春と修羅 第二集」所収の口語詩「一二六 牛 一九二四、五、二二、」の下書稿(三)の書かれた赤罫詩稿用紙の余白に書かれた下書稿(鉛筆で④)と定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品は「春と修羅 第二集」所収の口語詩「一二六 牛」。

まずは先行作品である「一二六 牛」の最終形態から見えていくことにしたい。

一ぴきのエーシャ牛が

草や地靄に角をこすつてあそんでゐる

うしろではバルプ工場の火照りが

けむりと雲を焦がしてゐるし

低い砂丘の向ふでは

海がどんだん叩いてゐる

しかもじつに掬つても吞めさうな

黄銅いろの月あかりなので

牛はからだいちめん

すっかりアマルガムになつて

こんどは角で柵を叩いてあそんでゐる

文語詩への移行はストレートに行われたようだが、ただ、「一二六 牛」の下書稿である「一二六 海鳴り」は、実に長大にして重厚、難解な作品である。

あんなに強くすさまじく

この月の夜を鳴ってゐるのは
たしかに黒い巨きな水が
ぢきそこらまで来てゐるのだ

……うしろではパルプ工場の火照りが
けむりや雲を焦がしてゐる……

砂丘の遠く見えるのは
そんな起伏のなだらかさと
ほとんど掬って吞めさうな
黄銅いろの月あかりのため
じつはもう

その青じろい夜の地靄を過ぎるなら
にわかな渦の音といっしょに
巨きな海がたちまち前にひらくのだ

……弱い輻射のにぶの中で
鳥の羽根を焼くにはひがする……

砂丘の裾でぼんやり白くうごくもの
黒い丈夫な木柵もある

……あんなに強く雄々しく海は鳴ってゐる……
それは一ぴきのエーシャ牛で
草とけむりに角を擦ってあそんでゐる

……月の歪形 月の歪形……

草穂と蔓と、みちはほのかに傾斜をのぼり
はやくもここの鈍い砂丘をふるはせて
海がごうごう湧いてゐる

じつに向ふにいま遠のいてかかるのは
まさしくさつきの黄いろな下弦の月だけれども
そこから展く白い平らな斑縞は

湧き立ち湧き立ち炎のやうにくだけてゐる

その恐ろしい迷ひのいろの海なのだ
はるかにうねるその水銀を沸騰し

しばらく異形なその天体の黄金を消せ

漾ふ銅のアマルガムをも燃しつつし
青いイオンに雲を染め

はるかな過去の渚まで
真空バキアムの鼓をとどろかせ

そのまっくらなしぶきをあげて
わたくしの胸をおどろかし

わたくしの上着をずたずたに裂き
すべてのはかないのぞみを洗ひ

それら巨大な波の壁や
沸きたつ瀝青と鉛のなかに

やりどころないさびしさをとれ

いまあたらしく咆哮し

そのうつくしい潮騒えと
雲のいぶし銀や巨きなよろし

阿僧祇の修陀羅をつつみ
億千の灯を波にかかけて

海は魚族の青い夢をまもる

伝教大師叡山の砂つちを掘れるとき

……砂丘のなつかしさとやはらかさ

まるでそれはひとりの処女のようにだ……
はるかなはるかな汀線のはてに

二点のたうごまの花のやうな赤い火もとまり

二きれひかる介のかけら

雲はみだれ

月は黄金の虹彩をはなつ

中地文(「一二六 海鳴り」考)『春と修羅』第二集 研究 思潮社 平成十年三月)は、「一二六 海鳴り」について、『春と修羅』(第一集)の挽歌群、亡妹への執着を宗教的倫理に反するものとして否定し克服する過程を描いた一連の作品のテーマと類似している」こと(あるいはその頃に思いを寄せていた人への執着)を指摘し、そのために「一二六 牛」に改稿したのだろうという。

浜垣誠司(「若き日の最澄(2)」『宮沢賢治の詩の世界』<http://www.ihatov.co>)平成二十年五月一日)は、末尾の「伝教大師」の部分重視し、「9ヵ月ぶりに北海道の夜の荒海と再会した賢治の胸には、前年の船上での決死の「行」のことが甦ったのだと思います」。そしてあらためて、「あの時の自分の挑戦も、末法の世にありながら、はるか伝教大師や日蓮に連なる、法華経的な衆生済度を目ざそうとしたものではあったと」する。

いずれにせよ、トシを失って一年半後の北海道旅行でも、トシへの思いが詩篇のあちこちに散らばっていたことは確かなようだ。が、これだけ長大で重厚な詩を、ただの背景にしか過ぎないようなエーシャ牛のたわむれを描く詩に改変し、しかも、それを最晩年に文語詩に仕立てようとした理由は今一つ見えてこない。

もう一つ、気になるのは、修学旅行中の作品群である「一一六 津軽海峡 一九二四、五、一九」、「一一八 函館港春夜光景」、「一二三 馬 一九二四、五、二二」、「一二六 海鳴り」、「一三三(つめたい海の水銀が)」のうち、実際に見たわけでもない光景について描く「一二三 馬」が、なぜ書かれたのか、である。

「一二三 馬」の最終形態は次のようなものである。

いちにちいっばいよもぎのなかにはたらいて

馬鈴薯のやうにくさりかけた馬は

あかるくそそぐ夕陽の汁を

食塩の結晶したばさばさの頭に感じながら

はたけのへりの熊笹を

ぼりぼりぼりぼり食ってゐた

それから青い晩が来て

やうやく既に帰った馬は

高圧線にかかったやうに

にはかにばたばた云ひだした

馬は次の日冷たくなった

みんなは松の林の裏へ

巨きな穴をこしらえて

馬の四つの脚をまげ

そこへそろそろおろしてやった

がつくり垂れた頭の上へ

ぼろぼろ土を落してやって

みんなもぼろぼろ泣いてゐた

まさか修学旅行の引率中に、馬の埋葬現場に出くわすことはなかったと思うが、小沢俊郎(『北海道修学旅行』『宮沢賢治研究叢書2 賢治地理』学芸書林 平成元年七月)は、「苦小牧あたりで誰かに聞いた話に深く感じてそのまま詩の形にしたものであろう。私が、かつて、北海道出身の友人に予備知識を与えずにこの詩を読ませたら、「北海道では時にこんな光景がある。何か東北より北海道の感じが強い」といつていた。農業する人と馬との間の愛情の通いあいをしみじみ感じさせる佳作である」と書いている。馬は馬鈴薯のように腐るほどに働かされたのであるから、飼い主が虐待していたのかとも思われそうだが、「みんな」が揃ってぼろぼろと涙を流しているところからすると、おそらく「みんな」の方も、ぼろぼろになるまで、馬と一緒に働いていたのだらうことが想像できる。

一九八〇年代のテレビドラマに、北海道の富良野を舞台にした倉本聰の「北の国

から」があつたが、この中に似たエピソードがあつた。或る老人が、大切にしていた馬を金に困つたために手放すという話だ。馬ははじめのうちは小屋から出るのを嫌がつていたが、やがて全てを察すると、別れ際になつて老人に自分の首を何度も擦りつけ、大粒の涙を流したのだという。老人は「アイツだけがオラと苦勞をとみにした。あいつがオラに何を言いたかつたか、信じてたオラに何を言いたかつたか」と言つて涙する。翌日の朝、老人は自転車ごと橋から落ちて死んでいたので見られる。

小沢の友人に「北海道の感じが強い」と言わせたのは何だろう。「北海道農法」について、『日本大百科全書』には次のようにある。

北海道農業は他府県と比較して積雪寒冷地のため、農期間が短く自然条件が不利であることや、明治政府の北海道開拓事業が殖産興業政策の一環として、未開地の大規模開墾を中心に進められたことから、少ない労働力で広い面積を短期間に耕作することを目的とした独自の農業経営方式が求められた。北海道開拓使は1871年（明治4）ホーレス・ケプロン、76年クラークを招き、欧米諸国の農学・農業技術の導入を図つた。

しかし、プラウ、ハロー、カルチベーターを使用しての欧米農法は北海道農業にはそのまま定着せず、明治40年代に、わが国在来農法と混合した畜耕手刈（馬耕によるプラウ、ハローの畜力耕うんと鎌による手刈収獲）という独特の農法が確立した。

また、北海道の高等小学校向けの教科書（副読本）と思われる北海道農業教育研究会の『高等小学北海道農業書の解説 高1 上巻』（淳文書院 昭和八年七月）には、「本道農業の特質」として次のようなことが書いてあつた。

イ、水田よりも畑作を主とせざるを得ない。
ロ、経営面積が大である。

ハ、経営面積が大である上に農期間が短い関係上、畜力の利用が盛である。

二、養畜を入れる余地が大である。

ホ、栽培作物の種類が多い。

ヘ、二毛作を行ひ得る範囲が狭い。

ト、冬季が長いから副業を入れる余地が多い。

たしかに岩手も馬産地として有名で、農耕には畜力の助けを借りていた。しかし、北海道は畑作が中心で、土地は広大だが農期間が短く、馬の出番の多さは比較にならない。プラウ（鋤）。賢治作品でも「小岩井農場」などに用例がある）、ハロー（開墾、碎土、地ならし、雑物除去、覆土などに使う機具）、カルチベーター（畑作物用の中耕除草機）は、いずれも馬の力を必要とするもので、戦後になつてトラクターが導入されるまで、無くてはならない存在だった。北海道では昭和三十〜四十年代になつても、土地の広さや雪の影響などもあつて馬（荷車や橇）が頻繁に使われていたが、札幌市内であつても冬の間は凍つていた馬糞が春先になつて融け、黄色い馬糞風となつて人々を悩ませたという。

北海道の馬はこうして春夏秋冬を通じて人々と共に働いたため、馬鈴薯のようにくさりかけて突然の死を遂げることもあつたのだろう。家族たちの悲しみも、共に働いてきた仲間であつただけに、悲痛なものだったのだろう。

賢治が「一二三 馬」や「一二六 海鳴り」の着想を得た前日の五月二十一日、花巻農学校の一行は、北海道帝国大学で花巻出身の佐藤昌介総長の話を聞く。賢治が農学校に提出した「（修学旅行復命書）」によれば、その要旨は次のようにまとめられている。

まづ新開地と旧き農業地とに於る農業者の諸困難を比較し殊に后者に処して旧慣幣風を改良し日進の文明を撰取すること榛茨の未開地に当るよりも難く大なる覚悟と努力とを要する以所並に今日は大切な農業の黎明期にして実に斯土を直ちに天上となし得るや否や岐れて存する処なり

話を聞いた後には、菓子や牛乳の接待を受け、次いで水産標本室、農学部温室、

畜舎等を見学する。そして、大学を出て中島公園内の植民館（拓殖館）を訪れるが、その展示について、賢治は次のように書いている。

中に開墾順序の模型あり。陰惨荒涼たる林野先づ開拓使庁官によりて毎五町歩宛区劃を設定せられ、当時内地敗残の移住民、各一戸宛此処に地を与へらる。然も初め杲然として為すなく、技術者来り教ふるに及んで漸く起ちて斧力を振ひ耒耜を把る。近隣互に相勵まして耕稼を行ふ。圃地次第に成り陽光漸く偏く交通開け学校起り遂に樂しき田園を形成するまで誰か涙なくして之を觀るを得んや。恐らくは本模型の生徒将来に及ばず影響極めて大なるべし。

続いて一行は二階にあがって、「各種本道内に用ひらるゝ農具」を見学している。この後、午後八時に苫小牧駅に到着。その日の深夜に散歩に出た海岸で、賢治は「二二六 牛」の着想を得たのだということになる。北海道開拓の様子を模型でたどることによって、賢治は「誰か涙なくして之を觀るを得んや」と書いているが、佐藤総長の言葉も手伝って、賢治は北海道の農業に対する思いを「二三 馬」に、そして作品番号を三つほど飛ばした「二二六 牛」に綴ったのではないだろうか（馬と乳牛では役割が異なっているが…）。

中地や浜垣が書いたように、賢治は真夜中の海岸で、トシのことや、自分の信仰についてもさまざまに思いをめぐらしたのだろう。しかし、そうした自分自身の思いについて書くことを、賢治はスッパリやめ、自分の脇でゴツゴツと柵に角を突き当ててたわむれている牛にスポットを当てることにした。無邪気でイノセントな存在にも思える牛の様子は、童話「黒ぶだう」をも思わせるが、その無力さは北海道の大自然の中に放り出された無防備な人間たちの姿でもあっただろう。真っ黒に迫る海に對峙し、窒素工場（実際は製紙工場）の火で赤く染まった空から降り注ぐ月明かりの下にいた牛に、賢治は寒さの厳しい北海道で生きていかなければならなかった農民たちの姿を重ね合せてのではないだろうか。

文語詩は基本的に岩手に生きる様々な人を描いているが、本作は北海道の牛を描いた異例の作品である。しかし、単に北海道の牛を描いたというだけでなく、これ

は、厳しい自然に立ち向かって生きていかなければならない北海道の農民たちの詩でもあったのだろう。また、本作を「二百篇」の中の一つに加えたのは、かつての教え子に北海道修学旅行での見聞を実際の農業に生かしてほしいと思ったように、岩手の農民たちにも得るべきものを得てほしいという思いがあったからではないか、とも思うのである。

先行研究

栗原敦「文語詩稿」とユーモア」『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月

佐藤栄二「牛」(『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月)

77 「秘事念仏の大師匠」(二)

① 秘事念仏の大師匠、
北上ぎしの南風、
元信斎は妻子もて、
けふぞ陸穂を播きつくる。

② 雲紫に日は熟れて、
川は川とてひたすらに、
青らみそめし野いばらや、
八功德水ながしけり。

③ たまたまその子口あきて、
元信斎は齒軋りて、
楊の梢に見とるれば、
石を發止と投げつくる。

④ 蒼蠅ひかりめぐらかし、
たゞ恩人ぞ導師ぞと、
練肥^{ゲラ}を捧げてその妻は、
おのが夫^{つま}をば拝むなり。

大意

秘事念仏の大師匠、元信斎は妻子を連れて、
南風が吹く北上川の川岸で、今日は陸穂を播いている。

雲は紫で日は高く上がり、青い葉が出はじめた野茨や、川は川らしくひたすらに、ありがたい功德ある水を流している。

たまたま元信斎の子が口をあけて、楊の梢を見ていると、元信斎は齒ざしりをして怒り、息子に向って石をはつしと投げつけた。

アオバエが光って飛び回るなかを、練肥を捧げもった元信斎の妻は、ああ恩人よ導師よといったは、自分の夫を拝んでいるように見えるのであった。

モチーフ

東北地方に根付いている隠し念仏の大師匠の家族が、陸穂の種を播いている時の様子を書いたもの（水田と違って、陸穂は種もみをじかに播く）。賢治は文語詩において庚申信仰や二十六夜待ちなどの民間信仰も取り上げているが、こと隠し念仏に関しては、一貫して悪意をもって描いている。賢治にはユーモアのつもりだったのかもしれないが、悪口としか受け取れない。もっとも、最晩年の賢治の一面を示したものとしては、貴重な作品になっているのかもしれない。

語注

秘事念仏の大師匠 秘事念仏とは東北地方に広まっていた隠し念仏のこと。自らは「御内法」、「御内証」等と呼ぶ。江戸時代に弾圧され、昭和初年まで警察ににらまれる存在であった。今日でも大導師（本作でいうところの大師匠）を中心に様々な行事が行われ、大きな影響力を持っているという。この地方の家は表向きは他宗の信者を装いながら、子どもが六〜七才になると「オトリアゲ」という儀式を行う。導師の指示で子どもに「タスケタマエ」や「ナムアマダブツ」を連呼させ、トランス状態に陥ったところで導師が「これで願いは受けられた」と声をかけ、以降はこれを秘密にするよう誓わせるといふ。賢治の父・政次郎は浄土真宗・安浄寺の檀家総代だったが、この寺は明治になって隠し念仏の糾弾に務めたことで知られる。従って、隠し念仏を嫌う気持ちは、政次郎にも賢治にも共通し

ていたようだが、宗教民俗学者の門屋光昭（後掲）は、花巻市内の浄土真宗の寺の総代から「自分は隠し念仏の世話人をしている」という告白を受けたこともあるというので、「賢治がオトリアゲを受けたとしても決して不思議ではない」とする。また、賢治研究者で賢治の生家のすぐ近くに育った佐藤勝治（「賢治と私の生家のある花巻町豊沢町の思い出」）『賢治文学のよろこび』寂光林 昭和六十二年八月）も、「私の家では正式には（おもてむきは？）禪宗、説教は法然上人の浄土宗、葬式は真宗の寺、真実の信仰はかくし念仏という三重四重の信仰で、それがその頃の町家の信仰形態だった」と書いている。

元信斎 秘事念仏の大師匠（大導師）のこと。ただし、「五十篇」の「秘事念仏の大師匠」（二）には元真斎とある。高橋梵仙（「秘事法門」と「かくし念仏」の詩）『かくし念仏考 第二』巖南堂書店 昭和三十八年三月）によれば、元真斎のモデルとなっている人物は、「宮沢賢治の親友佐藤昌一郎氏が、作者から直接聞いたこととして語るところによれば、小舟渡で「秘事法門」を行つてゐる仮名の大師匠を詩題にしたものである」らしく、「元真斎とは花巻チツコ佐藤勘蔵を指し、「その妻」とはタマを意味するもの歟」とのこと。また、ブログ「壺中の天地」における平成十八年十月十一日の記事「宮沢賢治と「かくし念仏」」(http://yajuru.moe-nifty.com/blog/2006/10/post_08c3.html)によれば、「賢治の「春と修羅 第三集」の時期に係わりのあったかくし念仏者は、伊藤治三郎」なのだという。

八功德水 読み方は「はちくどくすい」。八つの仏の功德を備えた水。『仏教語大辞典』によれば、「極楽浄土の池や、須弥山を取り巻く七内海に満たされているといわれる。八種の功德とは甘く（甘）・冷たく（冷）・やわらかく（軟）・清らか（清浄）・無臭（不臭または潤沢安和）・飲むときのどを損せず（飲時不損喉）・飲み終わって腹を痛めず（飲已不傷腹）などの性質をいう」。

練肥 アブラカスを水で練って腐らせた肥料。

評釈

先行作品である「春と修羅 第三集」所収の「二〇五六（秘事念仏の大元締が）

一九二七、五、七、」下書稿(二)の書かれた黄野(240行)詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、黄野(222行)詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(鉛筆で⑤)、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

「五十篇」には「秘事念仏の大師匠」「二」がある。本作では「元信斎」とあるところが「元真斎」になっているなどの違いはあるが、第一段落を見ればわかるように、両作には密接な関係がある。

①秘事念仏の大師匠、
元真斎は妻子して、

北上岸にいそしみつ、
いまぞ昼餉をした、むる。

②卓のさまして緑なる、
小松と紅き萱の芽と、

雪げの水にさからひて、
まこと睡たき南かせ。

③むしろ帆張りて酒船の、
ふとあらはる、まみまじか、
をのこは三たり舷に、
こちを見おろし見すくむる。

④元真斎はやるせなみ、
眼をそらす川のはて、
塩の高菜をひた囓めば、
妻子もこれにならふなり。

次に先行作品「一〇五六〔秘事念仏の大元締が〕一九二七、五、七、」を見ることにする。

秘事念仏の大元締が

今日は息子と妻を使って、

北上ぎしへ陸稻播き、

なまぬるい南の風は

川を溯つてやつてくる

秘事念仏のかみさんは

乾いた牛の糞を捧げ

もう導師とも恩人とも

じぶんの夫をおがむばかり

緑青いろの巨きな蠅が

牛の糞をとびめぐる

秘事念仏の大元締は

麦稗帽子をあみだにかぶり

黒いずぼんにわらじをはいて

よちよちあるく鳥を追ふ

紺紙の雲には日が熟し

川は鉛と銀とをながす

秘事念仏の大元締は

むすこがぼんやり楊をながめ

口をあくのを情けながつて

どなつて石をなげつける

楊の花は黄いろに崩れ

川はげしい針になる

下流のやぶからぼろつと出る

紅毛まがひの郵便屋

これを圧縮していったところに文語詩が成立したのだろう。それにしても、賢治の秘事念仏に対する反感は相当なものだと思わされる。他の文語詩であれば、夫への批判がなされていれば、対照的に妻が持ち上げられもするのだが、本作では、そんな夫のことを崇拜しているような人物として描かれ、陸稻播きを手伝う息子も、ぽかんと口をあけて楊を眺めさせるなど、家族全体を貶めるような書きぶりである。隠し念仏を賢治が嫌い、その元締をも嫌っていた気持ちにはわからないでもないが、家族ぐるみで貶めようとする賢治の烈しさに驚かされる。小林俊子(宮沢賢治の文語詩における風の意味 第2章) <http://cc9.easymyweb.jp/member/michia/> 平

成二十五年六月十八日)も、「その家族への暖かい眼はなく、むしろ悪意も感じられる。風景の中の牛糞に光る蒼蠅も嫌悪感を増す」としている。

そもそも文語詩では、庶民の生活や心情に近寄って、庚申講(「一百篇」「庚申」)や二十六夜待ち(「一百篇」「二月」といった迷信に近い民間信仰にまで関心を寄せ、決して貶めるように書くことはなかった。密通(「五十篇」)「そのときに酒代つくと」や酒の密造(「一百篇」「巨豚」)に対してもおらかな態度を見せ、キリスト教の牧師や神父、伝道師たちが文語詩に登場しても、隠し念仏のような扱いはしていない。「五十篇」の「秘事念仏の大師匠」(「二」)でも賢治の悪意を感じることが、ここでは大師匠と三人の男たち(船に乗って酒を買いに行こうとしている)の視線による戦いがテーマになっており、大師匠とその家族への侮蔑以外に何も描かれていない本作とは、少し異なるように思う。

飛田三郎(肥料設計と羅須地人協会(開書)「宮沢賢治研究」筑摩書房 昭和四十四年八月)によれば、賢治が独居自炊していた下根子の桜部落は、生活のよりどころが隠し念仏で、表向きは墓所を置く寺の檀家としてふるまっていたが、内心では蔑視しており、隠し念仏の大師匠である「知識さま」が全ての中心であったのだという。他の宗団からの圧迫をうけていたことから「どうしたことか、これら他宗教に対する憎悪がいつ頃からのことでしょうか、「ホッケ宗?」に一手に向けられる様になっていました」という指摘を信じれば、賢治がこれまでのやり場のない怒りをぶちまけたのだということなのかもしれない。

また、高橋梵仙(「佐藤勘蔵翁談話」『かくし念仏考 第一』巖南堂書店 昭和三十八年三月)は、本作のモデルとも思われる佐藤勘蔵(八重畑派)との談話で、佐藤は高橋に向かって「今日では、全国で私一人が真の「御用持」ということになる」。「斯様な訳であるから、何んとかして、私共の方丈けを御引立の程を願ひたい。そうすれば到るところへ行つて、御賽銭が、どつさり上る。渋谷地から爪弾をされた様な斉藤四郎兵衛などを引立ても金儲になるものではない。是非斉藤みたいな偽物と手を切つて頂きたい」と言つたらしい。佐藤勘蔵が本作のモデルであったかどうかはともかく、賢治は隠し念仏のこうした俗物的な部分も知っていたために、これを邪教扱いしていたのかもしれない。

もっとも高橋梵仙は昭和二十七年に佐藤勘蔵を名誉棄損で訴え、隠し念仏の正統について法廷で争い、勝訴したといった経緯もあるため(藤原正造「隠し念仏と黒仏信仰」『私達の郷土 北上川が語る悠久の物語』博光出版 平成二年八月)、こうした記述自体が、もともと偏向していた可能性を考えるべきかもしれない(藤原によれば「この訴訟に勝つためにとつたその手段の陰險な行為手段は、誠に一般人の目をそむけしめる行為で、宗教学者らしからぬものであったので、勝訴したとはいいながらも、隠し念仏の恥を天下に曝す結果となり、次第に信者が減少し」たのだという)。

それにしても、自らの人生を慢心だと反省し、文語詩の推敲を続けていた賢治が、隠し念仏を悪しざまに描いていたという事実は、最晩年の賢治を考える上で、貴重なものと言えそう。

先行研究

高橋梵仙「秘事法門」と「かくし念仏」の詩(『かくし念仏考 第一』巖南堂書店 昭和三十八年三月)

森莊巳池「隠念仏との小さな闘い」(『宮沢賢治の肖像』・昭和四十九年十月・津軽書房)

島田隆輔「文語詩稿」構想試論『五十篇』と「一百篇」の差異(『国語教育論叢 4』島根大学教育学部国文学会 平成六年二月)

門屋光昭「賢治と隠し念仏」(『鬼と鹿と宮沢賢治』集英社 平成十二年六月)

信時哲郎「秘事念仏の大師匠」(「二」)(『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』平成二十二年十二月 朝文社)

Explanatory Notes on Miyazawakenji's *Poems in Literary Style 100* Part 7

NOBUTOKI Tetsuro

Abstract : This is the seventh part of the series of explanatory notes and critical comments on *Poems in Literary Style 100* written by Miyazawa Kenji in his later years. This paper covers the five poems, “Rasya Uri (The Wool Cloth Seller)”, “Rougetsu (December)”, “Tengutake Ketobashi Oeba (Kicked a Death Cup)”, “Ushi (A Calf)”, “Hijinenbutsu no Daishisyō 2 (The Grand Master of Esoteric Prayer to the Buddha #2)”.